

『教行信証』における親鸞の歴史観

マイケル・コンウェイ

はじめに

『教行信証』の研究は、本書が完成されて以来、七五〇年近い間、数多くの者の手によって、行われてきた。真宗の門信徒・宗学者・僧侶に加え、明治に入ってからは、実証的方法を用いる仏教学者・歴史学者・哲学者・言語学者も、本書に目を向け、綿密な研究を進めてきた。このように、親鸞の主著『教行信証』は、長い歳月にわたり、各時代の研究者の課題に応じて、多くの角度から研究されてきた。各時代・分野の方法とそれぞれの研究者の問題意識によつて解釈されてきた『教行信証』は、今、この時代に何を言い得るのか。その答えは、研究する者の数ほどあるのであろう。本論において、親鸞の歴史観という視点から、『教行信証』について、考察していきたい。

今日と同様に、世界中に、社会と経済の秩序が根本から揺れ動いていた大恐慌から第二次世界大戦終戦までの間に、東西を問わず、多くの思想家は、新たな歴史観を示すことによつて、混迷する現在の問題性を捉え、よい将来への道を切り拓こうとした。曾我量深は、『親鸞の仏教史観』において、当時流行していた様々な歴史の世俗的捉え方に対峙し、親鸞の独自の歴史観を指摘して、それを『大無量寿經』による本願の史観として特徴付けている。また、三木清は、戦時中に記された未完原稿「親鸞」において、親鸞が明かした浄土真宗に、末法思想を前提とする仏教衰退論と、七高僧

の伝承における教義形成過程を漸次に仏意を開拓するものとして捉える進歩論と、という二面を持つ二重歴史観があるということを指摘している。戦後において、安富信哉も、親鸞の歴史観の二重性について論じている。

『教行信証』において、親鸞は、正像末の三時史觀に加えて、本願実現の歩みとして歴史を捉えている。つまり、親鸞は、釈尊入滅から始まる仏教の衰退を説く末法思想を掲げていると同時に、念佛による救済を可能にした本願実現の歴史を讃嘆している。化身土巻において、親鸞は、道綽の『安樂集』と『末法灯明記』によって、釈尊入滅の年代を算定し、時代が悲歎すべき末法であると断定しているが、教巻・行巻においては、本願が釈尊によって説かれる機縁を示し、七高僧の教説によって阿弥陀如来の本誓が機に応じてきた歴史を讃嘆している。しかし、親鸞は、この相矛盾する二つの歴史観を、並列的に扱っているのではなく、釈尊を中心とする三時史觀を、阿弥陀中心の本願史觀に織り込むことによって、仏法の壞滅を予言する末法の教説を、本願開顯の教説に転じたのである。本発表において、以上の先哲の指摘を踏まえながら、親鸞の二重歴史観を、『教行信証』の論述に即して、明らかにし、その歴史観が末法の教説にどのような新たな意義を与えたかということについて、考察していきたい。¹⁾

「悲喜」における慶び

『教行信証』の総序と後序には、親鸞の歴史観の二重性が最も顕著に表れている。総序において、親鸞は本願による救済が実現した歴史上の最初を、『觀經』の經説によつて描写し、そして、その教えが親鸞自身にまで伝わった喜びを表白している。一方、後序において、親鸞は三時史觀によつて聖道門の仏教を厳しく批評し、仏教の衰退を歎くと同時に、本願念佛の教えに出遇つた機縁を具体的に記している。親鸞は、この様々な縁を書き留める心情を、「悲喜の涙を抑えて」²⁾と表現している。以下において、総序と後序の論述に沿つて考察することによって、親鸞の歴史観が「悲喜の歴史観」として特徴付けることが出来るということを論じていきたい。

総序の冒頭において、親鸞は本願の用ぎを譬喩をもつて例えてから、本願の救済が歴史の中で実現した出来事を、次のように説明している。

然れば則ち、淨邦縁熟して、調達闡世をして、逆害を興ぜしむ。淨業機彰れて、釈迦韋提をして、安養を選ばしめたまえり。斯れ乃ち權仮の仁、齊しく苦惱の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を惠まんと欲す。

(『定本教行信証』四一五頁)

ここで、親鸞は『觀經』が伝えている王舎城で起った悲劇の主要人物を紹介し、その出来事が、『觀經』の教えが説かれる機縁となることによつて、「苦惱の群萌」の救済を可能にしたということを論じている。親鸞は、ここで、念佛の教えが『觀經』において韋提希の救済のみならず、「末世の衆生」のために説かれたことの意義を高揚して、歴史上に本願の救済がはじめて実現した出来事を、『教行信証』の論述の起点として掲げている。この文について、多くの解釈は施されてきたが、ここでは、親鸞が時間を超えた本願が様々な因縁によって歴史的時間の内に用く意義を明確に述べているということに注目すべきである。

統いて、親鸞は、本願念佛による行信の用ぎを描き、衆生がその行信とどのように拘わるべきかを述べた上で、「噫」という語を置き、本願の教えに出遇つた感謝と喜びの深さを述懐している。ここで、親鸞は本願に出遇い、信心を獲得することを過去における様々な条件によるものとして、「遠く宿縁を慶べ³」と勧めている。「宿縁」という語は、今、現に本願の救済に触れることを可能にした諸々の出来事を意味するのであろう。親鸞は、王舎城の悲劇を含むその諸々の条件を喜ぶべきものとして位置付けている。

そして、総序の論述を閉じるに当たり、親鸞は、また、喜びを表白し、本願実現の歴史を讃嘆しているのである。しかし、「宿縁」と語られたものが、この文において、「西蕃月支の聖典」・「東夏日域の師釈」という歴史上の人物の教言として具体的に表現されている。この文において、親鸞は、歴史の中で韋提希に出発した本願の歩みに参加した菩薩・

人師の教えに出遇つたことの喜びを表明し、その歴史を讃嘆しているのである。

以上のように、親鸞は総序において本願の実現の歴史を讃嘆し、特に、『観経』の興教の機縁と七高僧の教言をその具体相として取り上げ、親鸞自身の救済の不可欠な条件として位置付けているのである。総序において表れている親鸞の歴史を見る眼には、本願の救済を成り立たしめた条件が映り、感謝と喜びに溢れているのである。「忿り」・「怨み」と並んで、「悲喜」を語る後序とは対照的に、総序において「慶」という字は三回使われている。総序において、親鸞はひたすら本願による救済の実現を語っているから、親鸞の歴史観における「喜び」の面が鮮明に打ち出されているが、その「悲しみ」の側面は表れていないのである。

総序において述べられている歴史観は、更に、教巻と行巻において、広く説かれている。教巻において、親鸞は、本願の教説を中心とする法藏菩薩の物語が歴史の中に説かれる機縁として、阿難が釈尊に対して問い合わせを立てている場面に着目している。この場面は、本願がこの世において説かれる具体的な因縁を伝えているという意味において、総序における『観経』への言及と同じような意義を持っているのである。また、『大經』と印度・中国の浄土祖師の教説に続き、諸宗の祖師の念仏讚嘆が引かれ、日本の源信・法然の教言が引用されるという行巻の構造は、この世における本願の実現の歴史を追つて書かれたのであろう。このように、歴史観という視点から見れば、『教行信証』の総序から正信偈までは、本願実現の歴史の記録として読むことは出来るのであろう。

末法の悲歎と展開

この本願の歴史観に相反して、化身土巻において、親鸞は正・像・末という三時の歴史観を提示している。三時史観は、釈尊の入滅を境に漸次に仏教が衰退する相を説いている。親鸞は、化身土巻において一応この三時の思想を是認しながら、『安樂集』と『末法灯明記』を引き自釈を施すことによつて、三時の教説の意味を絶望を宣告する予言から、本

願念仏の教えを益々明確にする教説に転じているのである。しかし、親鸞は仏教の衰退を喜ぶべきものとして取り上げているのではない。『正像末和讃』と同じように、親鸞は『教行信証』において、三時史觀が説く仏教の衰退を大いに悲しむべきものとして取り上げている。

後序において、親鸞は法然との出遇いについて具体的な日時を示すほど詳細に述べていると同時に、法然の教団が弾圧の対象となり、親鸞が師法然との永遠の離別を告げられた承元の法難についても述べている。親鸞にとって、法然との出遇いは本願の歴史の実現の最も具体的な現れであろう。即ち、法然の教えを通して親鸞は本願に触れ、本願の歴史に参加するようになった。そして、承元の法難は末法到来の具体相でもある。親鸞は、後序の冒頭において、承元の法難が起こった理由を既存教団における末法時の誤解として押さえている。親鸞は、

竊かに以んみれば、聖道の諸教は、行証久しく廃れ、淨土の真宗は、証道、今、盛なり。然るに、諸寺の釈門、教に昏くして、真仮の門戸を知らず。洛都の儒林、行に迷うて、邪正の道路を弁えること無し。

(『定本教行信証』三八〇頁)

と論じた上で、「斯を以て、興福寺の学徒」というように、承元の法難の事由について述べている。このように、親鸞は承元の法難の起因を三時の教説の誤解及び、時代の限界の誤認として押さえている。ここで、親鸞は三時の教説によつて当時の既存教団と政治的権力を握る集団を厳しく批判し、釈の字を姓とする者が時代の問題を真に担える仏教教団に対して、死刑を含む弾圧を要請する、という末法時の悲劇を歎いている。この痛ましい事件の記憶は親鸞の「悲喜の涙」の裏にあるのであろう。

さて、最後に、総序から正信偈までを貫く本願の歴史観と、化身土巻において展開されている三時史觀との関係について考察を進めていきたい。一方が仏法の衰退とやがての滅亡を説くのに対し、他方が一切衆生の救済を約束する本願の実現を未来際にまで見込むから、一見、この二つの歴史観は全く相容れないもののようにあるが、親鸞の『教行信

『証』において、本願の歴史観が三時史觀を包むことによつて末法の絶望を大いなる喜びに包まれた悲しみに転じている。曾我量深は、右に述べたような本願の歴史観に加えて、親鸞の思想において、『大無量寿經』の歴史観を見出している。曾我は、『大經』に説かれている法藏菩薩の物語を、釈尊以前の仏教の歴史として捉えている。つまり、曾我は、『大經』の物語が先史時代の仏教史であると言う。超歴史的真理がこの世の中に用くことが釈尊に始まつたのではなくて、釈尊以前の覺者の歴史が『大經』の經説の中で物語として表現されていると言う。このように、曾我は釈尊の背景に無数の仏を見、その根源に『大經』が説く阿弥陀如來を見出している。

親鸞は、釈尊の背景に阿弥陀仏を位置付けることによつて、釈尊を中心とする三時の史觀を、阿弥陀を中心とする本願史觀に取り入れ、末法の危機を解消している。三時の教えは、釈尊の入滅に重点を置き、仏教衰退が無仏の世において必然であるとするが、右に見たように、本願の史觀には釈尊が阿弥陀如來の用きをこの世の歴史上に開闡するという重大な役割を担いながら、釈尊は阿弥陀如來の用きの表現であるから、釈尊の入滅は必ずしも法滅につながっていくものではない。このような位置付けは、既に釈尊によつて『大經』の流通分において暗示されている。親鸞は、化身土巻において道綽の『安樂集』から次の『大經』取意文を引き、「淨土真宗は、在世・正法・像末・法滅・濁惡の群萌、齊しく悲引したまう」ということを証明している。

經の住滅を弁ぜば、謂く、釈迦牟尼仏一代正法五百年、像法一千年、末法一万年には、衆生、滅じ尽き、諸經悉く滅せん。如來、痛焼の衆生を悲哀して、特に此の經を留めて、止住せんこと、百年ならん。

（『定本教行信証』三二三頁）

このように、釈尊の背景をなす阿弥陀如來の本願は、時代的限定を持つ釈尊の影響の範囲を超えて、あらゆる時代を貫いて衆生に用きかけ続けると、親鸞は論じている。親鸞は、『大經』の教説を用いて本願の救済の普遍性を強調することによつて、三時史觀に潜められている仏教壞滅の危機を解消している。

しかし、親鸞は三時史觀を否定しているのではない。親鸞は、三時の教えが説く末法の時代において、釈尊一代の教の本意が本願念佛による救済を勧めることにあるということが、益々明確になると言う。釈尊一代の教には、様々な行業も説かれて、正法・像法の時代においてこれらの行業を修する意義もあったが、親鸞は、末法においてこれらの行が「久しく廃れ」たと論じ、末法であるからこそ、淨土の真宗が「今、盛なり」と述べている。親鸞は、諸行が時代に相応しないものとして廃れていくことによつて、選択本願の行信の帰依すべきことが益々明らかになると論じてゐる。

おわりに

以上のように、親鸞の歴史觀には、本願実現の歴史觀と三時史觀という二重性があり、その二重性を、「悲喜」という親鸞の言葉で特徴付けることが出来ると述べた。そして、親鸞が三時の史觀を阿弥陀如来を中心とする本願史觀の内に包むことによつて、末法の危機を解消し、末法の教説を本願開顕の教説に転じたと論じてきた。

註

- 1 本論において、親鸞がどのように歴史を捉えたかという問題意識に基づいて、『教行信証』を読もうとしているので、多くの議論の対象となってきた文について、歴史觀という視点から考察し、また、意味合いの多様な文について、歴史といふ限られた観点から解釈していくが、それは一つの提案に過ぎないものであつて、これらの文の意義を断定しようとするものではない。
- 2 『定本教行信証』（法藏館、一九八九年）三八三頁
- 3 『定本教行信証』七頁。『定本教行信証』よりの引用は原漢文を書き下したものであり、字体は通行体に改めた。
- 4 同上
- 5 『定本教行信証』三一〇頁。